枇杷園七部集三編　下

911.3
ビ
下

三日月集

白囧撰

花鳥にくしきとくのひたる古寺の名を
来鶴院とさへや紀むりし名を後の翁
此寺に勉屋して
有とあるなとへふも似たる三日ふ月
かくハなりぬ出しきまり亦五条坊本児と
いつなりたふ吟をもうしりまて三日月
塚をさん築たるそきさへ五十年のきのふ
とあり言て瓦破を本意法とり狐狸
ころ海く子人まむさまにすこりかり出

こゝに濱島の古寺ハ法華の信　實長者
なりける上人の蔵つを営うりて慶昌を
與し小堂仏生たちよふまけふいとふこ
角州庭中に松柏あるを珍垣外に
風色ゞ絶をとゞく吟客に西
おこし置き附するをや

天明六年冬十月二日與り

三日月にはし似たそのよ二日月　士朗
四附ゝや了に夕くれの松　曉臺

宮いかの道ハ芝ゆく人の手あけて　萬岱
霜に翁を引うたきたる里　岳輅
宮に戸に落くをりき胡朗　閭毛
為ゝなるやうに見畄翁草　岱青
落なき梅の花ちら花の枝　他郎
ねてにこゝろに洛陽　春　沙漠
夜の為さゝいろ〳〵ふきて西に　茶雷
足利そめに衣のとくうし　紀鳳
うけふをてたけハ繞小羅もなし　少汝
杜海棠のたきかし家月　白圖
きらゝと風ふきむうふ銀河　羅城

躍崩しけるりとよる長濱　朗
盃つくしてもとこやく坊主くさいや　青
ことの隠く寂きさけらよ　萬
菅公飛仰れる色しなるる哉八　輅
古筆元め出ほをく縄の一人　毛
うまも墨をとりて法小さく也けり　漢
山絨すく小法師とも手も頼　朗
雑面をうつしと別れてむられ　圖
あさ波よせる荊萋飛中　雷
畠取る埼をむしるよ追はるき　鳳
陣盃の恭六小仰して出る　汝

大家同飛名比留遠を節ふるん　朗
のし引むはふ箏ち古　城
男山若葉の小面白ふ雑し　萬
黒色見えまほふ八まかす　輅
すゞ路ふ吐息清きたるつ見る庭　毛
露飛脇取しまるかして　青
ある傍よ真取あるりの秋仕舞　郎
才飛擬場ふしと古寮をうふ　朗
くるしと掴織すくねくよき枕　汝
又このきそしよの日和ありけり　鳳
肯とある花を集く山桜　圖

風雅ともろの蛙ひろう哉　漠

三日月

唐棹の梢にひかゝる三日の月　暁臺
鋸日や三日月ちきる川柳　他郎
鴫一羽横にきれたり三日の月　騏六
丸うなるものとハ見えし三日の月　蝸角
百舌の尾にとまりたる三日の月　岱青
三日月の草の露にもかゝりけり　闇毛
うすものの裾に入りけりみか月　大阜

夕暮の岩とや定めん三日の月　白岡
三日月の袖に入とみゆる哉　兆如
三ヶ月ハ石山寺のしるしかな　木人
三日月の傾む影る湖かな　松兄
雲の辻や雲の人来し三日の月　巨川

時雨　こゝろ〳〵

嵐山のぬきぬもなくし袖時雨　来山
志ぐるゝ雨もまつ便もなし萩の枯葉かな　宇洋
しくるゝとそ月の出る小雨かな　五道

しぐるゝや宿に松風杉の風　霜居

杉だちはぬれ色高き冬の雨ぞ袖時雨　江戸 一蕙

ふりこして来て家宿の時雨かな　大和 鴻月

おりおりに小啼ならしたる鳥の声　斗入

こゝに泣しや小町が跡の幾世寒　岡崎 趙鳬

風や清しと小春ふさぐるむしろ哉め　也人

こがらしや家と落込音のやみ　一之

かゐわし　枯尾庵

見るとあるおきなしも今は枯尾花　草人

風露尾花こぼれて初しぐれ　イセ 伯先

村雨もよしあしとよ枯尾花　蘭水

うれしさに顔と見て沸しぞ　江戸 胡隼

枯跡し露ばかり寒き戸白哉　許凡

冬月　水雪

志ら雲露ちぎれやさて時雨の月　李臺

冬の月うらし人の木服哉　巴水

あらけなし松を出でゆく冬の月　葛齋

燃ず家八むしろかたり冬の月　武昌

淋しさを中にてうき出た小鴨に　啓甫
松の木の名さり形中に鳴千鳥　花叔

雪　みそ出

はつ雪や笹に鶯こえてさしゝ　春暁
かゝる白の菜喰ゆきの加ゝるに　重厚
雪ちらし海士の藻塩浮出る　越後 左琴
雪つむやふりきらぬ竹の奥　蘭崖
今は消いて雪のふる戸口かな　希言
掃あとも出かけて雪のふる　南陽
雪きの夜中にて見る中その首出に　庭甫

如月や門雑家は雪に朱字紀　梅間
ころそ見るや城下ちらの大根　春蛾

蕗菜　霜　氷　冬籠

戸口まて蕗菜ふかり住居かな　サヌキ 忘巳
夕暮や蕗菜に浴るとのも良し　大ツ 亀粟
小男鹿の子つれ出る来る蕗菜に　三本松 冥也
見る所との米まより董かな　大蘇
山鳥の名のこえさへきらぬ霜来に　万岱
志もの戸口行を告けいつる　長裔

鳥の啼山かけハよき冬こもり　魯隠

冬木立　枯野　雜

世の中やとちらを見ても冬木立　鶯岡（手ハ）

鳥の身を朽く里のうき世かな　青以（スハ）

月も雪も立かこひ〳〵の嵐山　きを女

寒き夕比ハ風にふりかゝり　杜石

はしやある雲の中打冬の月　猪米

孔子盗跖一塵埃

籔くゞる人さへも中に冬かれや　成美

寛政四十月八日興行

冬の夜ハいつまでも見るとも静りかゝ　白圖

日ハきえし〳〵と霜の上もち　岱青

まつ〳〵を麻のうぐ気の影をとる銭て　士朗

皮茸のりうつる風をうき　徐英

擦きふあるまとねたる月の人　大阜

涼絃ほつ出し〳〵芋　鮭の秋　昆明

まさ茶流の吉ろ〳〵にも志踊鳴　騏六

うけあらわの中ハめの松　圖

去禪土器を手にとりて
祇園を参まゐて徳岩寺
書ぞめも二の町ハ古年たかれを
うつらひすに絹く深こき黒外
きんこまとわりぬまゐる晨明よ
はるふくハちりきし宇治山のきり
秋さきき小鶴のこつとなりえんとなる
にふくの方もけふ参る七十
ちまハそそ不動桜ぬ寒さひらく
祈に蓄なき四月廿日
えしくしと媼ぬにかく語もするに

をにい小女ぬとぬいまゐまゐに
論尓とわしかれしくろく風の音
ながれぬ薫をもちちまちや
うし坂の社まひしき獅子以
戸板はと河る舟脊原来なに
杉しろいしたつねても拘いに
娘ぬ海ぬかまく打しこと
初めな花にくらし方杉
秋たちいそく不破ぬ夕暮
竹杖のふしも七つにまちる如月
酒くむための蜷磨なり

青 朗 英 皐 明 六 圖 青 朗 英 皐
明 六 圖 青 朗 英 皐 明 六 圖 青

水鶏とゝいふもこゑある浅井や　朗
名物の平清をたゝく客人　英
燕尾川くし扇ならふ日のうつり　皐
かまにうつりたる木に花の咲　明
きさらきに名をこれなかめさき亀　六
余寒元ゆく彩霞楼上　朗

歳旦

春くるハ書ハありかなり奥山家
親路のちまぬる糞さへ掃ちきり　松本　冬花

うる書のわかとあつて新綾立
いてこぞり
門書新宮より見西る鳥居に　十州
元日八うましし二日八御まし已　文左

梅　柳　春水

酔仙をんやうにふりうたの梅の花　計之
志つかなるとの糸ハ柳の梅の色　至　十邑
おもしいはとは花ハ咲より梅の色　兆雲
梅と月とそ新宮の天はかりて　岳輅
香りから柳八まさう葉ふくり　百池

おほろくや柳にとまれハやまし道　吐牛

丹波にて

むまてふましうき世に出る春の水　青阿

鶯花

うくひすや家并の戸に関もなし　桂五

鶯の声ねりしきりし留りかな　巣兆

鶯や人のうき世を鳴て居る　雄潤

うくひすの香をしる時分そ汁焚む　北鳳

鶯の啼おほをたり杉北りの世　五雄

うくひすにあかくくりむ指かな　遠州 琴枝

花の雲そひ山の山ハ花ぬりぬ　柳荘

月と日と花の中なり那山　大魚

春の日の遠きも花のちりかな　天老

とまりもちる花々月の秋かな　兵庫 呉来

ちる花もかゝり付たる山家かな　物知

曙のふみよれ上にそもなし　虎杖

月花の秋ハむかしき風情かな　騏六

咲く花をみるや紙むや春のたゝ　方朔

半分角花に詠ぬもわらひそすか　如毛

くらふきて春ゝ家ハ

人里ハ霞の奥なり山さくら　玉江
清水ハあれとも花のゆかし山　文雲
さくらの日暮るとなしハ山の端　猿左
一とせを花に暮しをとりつめる　櫻かな　草竜
すゝめなく日をちら〳〵と桜哉　百扉
まろ夜の花のあらしめよ蓮はくら　徐英
花二日ちらハねくてそわするま也　素郷
花ちりわちるよ里かハなかりけり　棹堂
さくら咲てさるき松の木の影ぶ　椿堂

春雨　かすミ

春雨やくれ〳〵の木に降にけり　蕉雨
はる雨の夜もきたんの河内ぶ　双鳥
とひ〳〵に家ゆり出る春の雨　かいめ女
春雨やとくよりかきて木の間ぶ　松本　真蘂
朝ハ山ミ万歳村のわさりかな　大魯

すミれ　帰雁

とおしもなしかくもりの菫草　江戸　一茶
萩の咲いる沸しくも菫哉　延之
雲と月と桂ぬいての雲よ　布舟

けふハ来てきのふを啼の別かな　桂重衣

啼く声日ふさへまよひの雁かな　関叟

春月　春風

色々鳴おすゝしよなるの月　魚堂

春の夜の月にも雲のくまなかり　畠 雲帯

木々ミなをふはよのハふ守春の月　竜君

なる能く世にふは春の扇かな　京 可菫

春の月綾瀬に水にうつりけり　川ゴヘ 菓波

ゆふなるとおて出たり春の月　スハ 若人

煙にもむく君中も似たり春の月　京 蘆涯

くさも木も茂より出くはるの月　葛井

加免に春にけなる山悩り春の風　士峯

春風のちよみつしと悩く止にかわ　柳涯

散桜に鑵をふりなさの風　眄央

雉子　暮春

けり出しなくきてすゝな　東水

雉子なくれふし瀬のふとくる　射道

馬市の加るゝ家も見えて雉子の声　下ツ本 喚之

氣八春を惜むゝなしせぬり　福島 春唄

大西尓まハのころ切尓なれ　八代 吐文

彩とゝ法のう川もあらし東山　双南

申くるやう治の川霧立さる比　墨山

雜

正月のうたてもそめたる西座ゆ尓　了圃

清き霧尓家鴨なかし門の池　嵐外

来りし八悠うなりなりたるの山　松本 可者

知とりぬる岸とるらん松の為　同 泉阿

宿とりて濱名見尓申く去日か　三州 幾久成

千鳥下りて田面見たるゝ渓去ゆか　武二ノ宮 定雅

菜の花のいつまで咲き松の霧　素外

さひしけれもめてなさの二去の山　イセ 推巳

言う啼る本さへ桃のはなへなふ　一音

ふゝきの浮やとまてすさとは　ツカル 玉之

海つ風の萩とりうきしき二日ゆ　沙鴎

正月のうたまたハ人のたのしかり　白圃

春花蒼一染なる見尓なり　松本 両曉

志ら魚の動けハうこく水のいろ　大坂 祖淳

神代より形くるや瘦の知と角　芳中

枇杷の花尓ふこれのなく垣根代　イセ 鹿明

風もまた涼し二すのあるし男　五明

時鳥　卯花

暁のうきしきさとのよかくおほ　民明
鳴ぬ日ハ黒田にするほかとおほ　金鳳
かとくきす草の葉ひろく難小　いせ 蘭二
卯月の二度ハしきしてかとく経　いせ 杜影
ほとゝきすきゝてきけハあかく水の音　与松 女
日枝に雲引ふせた里卯の花　白岡
卯花に篤引かけてちらしけり　亜渓

けし　夕立　五月雨

涼しさや格子をすつるちるもなし　長翠
柔やとハあやめくさの五月かな　千當
五月雨にようやくねこの八朶来　魚秋
むらけしの流ゆより落る湖の月　大坂 玉寅
夕立にもくて出て出る月夜哉　素檗

閑呼鳥　蝸牛　ほたる　蚊　故卷

なとて世は鳴も定めぬかんこ鳥　桐栖

飛志のふ雲かくかゝむこ星　六悟

人影来ぬこゝろてたゝ世蟷螂　六 芸門

何ま々なる二葉ふのなるゝふつり　同 呂理

流し井つふつ速たる蟷螂　四才半 入素

志からしや飛ふ母る思する乞食の子　六 自徳

雨雲や蚊やり当てる松ら人　八才 斗睡

短夜　夏月

みつの夜ハ扇の尖もすゝりけり　蛙聞

みしか夜や三日月ともに宿の友　翠 仙市

天非開眼

あらしきく夜るありて眼をふさく　十一 無説

何事もおもハそのまゝ不露命　宇六

短夜もさすていそらぬ山家かな　七 宗古

名月とてつゝ出よ世ハ夜月　六 千丈

すゝしさよ月ともいそぬ芦の月　莫二

こゝろせ川ふかし

はしるハ竟しそよた世鳴ら鷄　青川

雜

夏乃日もかゝる伊ふ色の行衛ハしらて　野雀

竹の子尓これもうつ出すゝ朝の露　下野 阿孝

志ら萩の卯月とまつりし山家かな　汝蘭

高き山尓のぼりけり高き

積もりし海猫を見るゝけの花　下 文几

すつの雨竹よりさきの初りけり　越中 呉山

咲く波や伊勢の田植の伊ふ霞　五周

みしか夜やまてしゝたる竹の月　武陵

此頃ハ碇も扇のうしろかな　濱藻

正尓わきとひゐるゝ絞

世け出すも麻の葉色ハ糸ひろめき　蘭美

竹碎日

祈る人するゝ強思恐怪和尚の意讀を乞しけるか
としあるまじ尓庫小にて王此人一日弟子扉を
請ひ来たり師閑くゐる子をえて白隱の弟子を乞し
あるとを遠行りとよかの和尚の縁をうつくひ
あふ念や悔してその法を仰ぎあふよや若て
いふゝ遂をしとより禅味をしゝけ知らるハ

それ徒を作くにもならはしありて家になる此
もののことく竹の室のことくまことに鉄様のとき
このときうき主ふりなかしけふ生をとめてたく
ねよあすりとそ知らハそのならしとねむるは
まへのころあめりて苦になりまいらせを
おこのまさとのまゝにまてと見も家なりしと
ねもふとおりやし実もさうよけふもさうよ
とてうまのきまりぬこの日竹酔日なきハたや
まうならしとおもふことゝしらすわすれぬ

竹植るすはやくもかなすをたのむ哉　少汝

うゑくのく竹にゝゑりく古巣なり　白図

志やりしとゞ紫のうらう竹を植よ亀　魚坐

ゐる紙に植まするそ竹ハならしろき　布泉

うゑ来て竹の根をはけへ嬉し牛　大阜

竹うゑるひまにきさらをよそく哉　天老

雨に植る竹ゆりなかくうゐなかな　毘央

竹うゑて又植なりし昔の花　士朗

まゝすうゑりくけふ一日のあるなり　羅城

竹植て古谷ゑなるやとけりうる　徐英

月影にさそのまて竹をうゑよ亀　松兄

きけ植て松八本ふらく家になり　方明

ゆふハかり行にやとりなたひ旅かな　岳輅

行うるゝありつく寺の男かな　行脚 玉眉

山傍幽翠

すてゝ絽我宗や松風桐火桶　桂五

売のまゝむ花の中乃丸家かな　騏六

夏月清蔭

墓うき世の人をわすれかね　于當

ひとりねの夜ハ何事あまりなりし夜の月　椿堂

清節凌秋

蕣のゆふ色を告る雀かな　青川

たしかにせうさひしう来まさう　瑞馬

幽叢鮑烟

八日月鶯もふくらむたけり　成美

文さやえゝや何うハるゝふしの山　芦九

坂もり火や行田の赤ゆ使かな　自樂

虚心友石

石藤の花ふる煙ゝをゝるまゝりに　南陽

行志りん志くちふる秋の居所　猿左

湘中清心

雨にきる笠をひけて紅絲　斗入

すゝむしにまゝ[illegible]うこくすゝ虫に　弁六

清晨帯露

しつかさに雛子の尾をひく戸口かな　蕉雨

その音に蟹うちよする川かな　一草

清風高節

月かけにとりゆく竹のあらしかな　素檗

色ある葉をちりと吹そむる竹の園　了圃

露凝寒葉

さくらや松へ露の附をゆく　騏道

しら露に芒の葉ひきたる月夜かな　可都里

木つゝみは紅葉の森をけおちか　双南

朝雲密翠

そのうち思ふ扇にうつるききかな　同　其成

五月雨は山の本行法かな　魯隠

緑蔭漣漪

そよくと芒根に出る中あり　柳荘

秋風の吹につれそふ漁村かな　樗堂

移竹半墻

さくら人をちりくれふるや杉の風　卓池

暑さ茂て水の面に入日かな　國瑞

家々の松はたれの雲の中　宇祥

鳳枝吟月

こしや表も虫の音中なり　白居

三日月を外に見て紀よせて冬ハかり　艸竜

前西寒光

きりにやゝふしおろしきる尾花　友圃
樹の多ありく茶も走りしの雲　長裔
日の足くぬ所ひんえたり冬の海　景山

享和元秋七月廿五日興行

河沿魚捕りて寄りける小庵に　桂五
その帰りもりをしむ秋の日　少汝
月や夜あめやと宵の友する也　羅城
荒もあと流れぬ花ー　硯　魚坐

手に送りしみを持たるうつせ貝　松兄
をりく連あかつけるかう梶や　大阜
鶯あらうとなしにとるさとさ　天老
まくら蚤をつくる御禊の正月　玉江
吸との示ほまさ色ため唇くし　玉雄
霄去やうしむ秋のもし砂雲　葛井
張すてし網のうへゆし鴫の声　橘良
身翔田八藪の左で来すりけり　嵐堂
舊衣小辛抱済の文字を引包き　岳輅
あくるき居留ヘうつすもの　母　蘭崖
茶もはや芋のままねまく日は出て　方明

空はなしまる月乃ひかりあけ
雛子の尾に霞の猫をうち渡し
まさかくしや紫色のきまくら
傍脚の大口着たか小鉢に
傘さしかくる西のとも火
襟巻ありいとかいひし　根穀垣
まつはるは處に加へし　蔦葉
白足袋はうしろそえ白き　落氷
琵琶をかるとて様にねころふ
松風の一身四八からりしく
すこしのひまにふえる女　位驚

居水間朗五　汝兄堂老江雄

ゆくさきに翁に夕飯とききにいるなり
ふたとしのひとつとし更とけうる月
わたし出る浜田の芒の尾花して
黄菜の花を残うつし御車
家眉は白く見えも折りにふれさえてたい
膝ふとくさまてあまりふる竹に
ちりなちハ新興ちの穂に動きなり
碧色の藻に出さに入れるとふりそ藤
青桃の青き中よりいろちりて
ほのかしかふるさとの　三津

井良堂軺厓　明居水間城

初秋 星夕 盆

雲の峰松ハそのまゝ秋立ぬ 越巣
ちる葉ハ桐の木持て秋ぞし 滄波
鴈鳴やきこえてみゆる天の河 可都里
夕暮や露にをり出て天河 壺伯
ねぶれよとのまつに宿れる星迎へ 白圖
秋を背ふしの家ゑし入江かな 紹鳳
世やかはれてまりや忘ぬる盆の月 以南
うらしき盆やいもり門火の夕嵐 秋國

朝皃 きゝやう

いく秋の世を朝皃の松の枝 士朗
咲ならし朝がほ秋もしらず 自樂
あさかほのひとへにゆかし旭かな 大坂 尺丈
華や飯の時見たきゝ鎌倉山 玉湖
桔うつ數のかはりも月萩かな 蛙村
松風の音うたまかりきを旅 ゆき女

蘭 菊 萩

香を焼んと菜よ絶るく山路かな　月居

かくれ家に客得の菊ハこくれ庵　エド 祇徳

萩路萩秋さうれしも月にうかき庵　サヌキ 琴州

尽きて居れハ淋しうするぬ萩の花　嵐堂

志らきくの切戸に分入萩すゝき　李閑

札添てハ華しまきくの汲めかな　高砂 砂文

との家も知らつ形なり萩の月夜　卓池

仲居か種好れまかり萩の花　帯梂

小畠といふ山中をとをりけるに、鹿の見ひき

かゝけてこさしまるをこち路

掃ふやきすゝきけさ西まろ男か着かな

尽るか形と詠たりし人く哉と無常にして

萩のうへに乾かぬ雁の涙かな　羅城

秋風　秋蟲　芭

朔日や急ぐ旅でも秋の色　外六

人の物いひ人ハ忘れても秋の風　エチゴ 喜年

あき風の好む松ハさびし峯の上　上穂 山皐

秋風のふきすさぶ背の薄かな　左雀

あれし軒を又吹わたす秋の風　嵐素

庭なれハ掃ふとも淋し秋の蟲　蒼虬

夕露のけしきゆり出は芒かな　瑞馬
風の尾花ちり袖ゆたく吹よみぬ　子東
露ありて芒折りまけ夜の路　少汝
きましもて　秋蝶
霧　寒うし　草の秋
萩の花の八聲つくろひんきうしす　如東
胡蝶にみえかくきと淀る草葉かな　さと女
三井るのうすにまるや秋の蝶　祐呂
包む草の露すて枝や隠むらん　橘良
押わろへや石にとまる秋の蝶　白居
いつきの葉にかゝれと謡る

紅ちりぬるも不里残りけり庵遠　仝

雑

露志みくまとにつきにきの庵　乙二
志ら浪や秋の日に晴るの影　一艸
八朔の梅さくらにうまれたし　芳丈堂
人をみてく晴れり秋の山かしす　瓜坊
稲妻や埒みくりても今おし　葛三
嵩の古巣をとみえて秋の嵩　圃暁
二子のまゝしはやす
示しなすき木槿垣根や淀る　梅固

ゝ歌ふけれど捨てゝ鳴や秋の蟬　一炊庵

淺茅生や清西のうへ切翔ちし　冥々

かくてこそ我なつかしき秋の山　硯静

月

名月やはなしのとく川むかふ　都貢

あふむく顔のひくさよ秋の月　蘇 魚村

雲ふ清めし渡る月のひ消ず　尼 壽松

月すむや琵琶のほこりを拂ひける　周瑞

のみならぬの浦を八月の静なる　魯堂

こゝろあてくの松ハはつまてく撰の月　字曲

我秋ハ月を頼くしあいそうし紀　竹有

渓ハ水ふしきハ竹よ秋の月　古明

享和二年春二月

少池補

名所寄集

春の日乃花の木かげをたどり
秋乃月の紅葉の露に盃ぞめる
こゝ京よりひさしく八幡もあらう
すほしう夜露にあのつうら
冬枝ありてこゝろしきりかり
自適は これあそびの ひとつむかし
ふ二乃山やま見て紀乃の露
あらし雪のくしき雲の色
すすむすて人のおもうろもてなし
はうすもき梅の八雲林八さうへ

夏の日の照らくにも冬の
秋乃降こゑる雨にも唯此山我
見ま八世の井の困苦をとも忘れ
猿なましき事もなくてなん
なくはこ弟活（こまあそびの二ツなし）
東坡居士乃秋托これハ五十と勢
いまさらり百年の生のしこわても
よそたの下まりる心托やすしこらり
梓乃木なんとゆる南部ましきさ
菴の主しちふおとふともよまる為
しこら蓮何もなく托てたらんは

いふ玉の緒も由らきたよりのり
よ頼望く（見捨ひの三ツなり）
鶴の足なかく鴨の何し短し
よしやこの頼名なし人の心く家
名なし鳥下る家に只もいのい
世何よ頼まよ捨たふと

名なし翁志るすに

寛政八丙辰年

秋の遊ひ

隔つやみえて又見ゆ天の川　可都里

月なき磯の秋をまつ孫て　士朗

柳たぬる宿の桂も苔むらん　岱青

雨の衾のとるも佛しき　斗入

馬追てせり立られし胡朗　岳輅

ふれるといへと以ふ狙の子　青

小松寺の網戸の樅壁そこねたら　朗

露ちる歸り坂夕のほの中　輅

吹帰るに後て一声郭公　入

あら八十年て山のさびりぬ　朗

そりねも色でもとけぬ人まて　青

夜涼き禱て豆腐切らむ　入

月恋し紀吹草乱も色になり　拾

雪踏引する招木の念うし　青

蒲公英の盛より乱も乱の服　朗

たれのさくりの色きむしろも　拾

雨念る書乃椀とおもひ免ん　入

車よりうちかに泣人も誰そ　朗

此雨を志のふ新雨と花付はや　蟹守

けらくに生ふる蕗松　鏡平
世の中を才覚をする福の神　五芳
臼挽の所へ山の登りまる　里
釣針の曲りる人アつり置とて　平
棣棠たまハ卯花煮飯　守
秋風乃白河まてハ程遠し　里
火打袋をあけ方の月　芳
さまハこ於蔵ヶ御法を申されし　ち
巳ヶ覚きら〵千鳥啼なる　平
此節ハそれ急ぐさの名残りり　芳
二布縫しおし裏の檞本　里

吉日のゆきハ大ワとく忌日まて　平
あらし津きゆふ献火耳注　守
山鳥の尾呂ハ見事しと立白ひ　里
ちらり瘤すて妻アホなり　芳
文覚ヶ取ちらしたる新の茶　ち
ゆるさし日まりに蔵の保ヶ前る　平

ゑをく

思ひしや弁に届くさくての川　漢甫

人のうへを流してけりな紙治　蕙酒

草菴

胡鳥の秋ハ来ぬかりに咲にけり　標冠

胡鳥や之らつ咲ても秋の色　嵐外

見定る露もなしや萩の葉　芝長

吹まうくは秋を知りかぬ芒かな　五芳

花芒あらはけハ見田る戸口ぶり　竹翁

見るくの草の中より芒　英紀

大磯の出しと笑えし摂女

尼となりての古さとなる

安通むかしと語しとき

きなしり我色るとさす

花ちるさかすたえたるゆり女郎花　其貫

女郎花ゆく由る草に交りけり　如毛

朝露や嬢の川の草ふしぎ　梅丞

星清し夕雲ハ皆宿となり　白黛

其露の影にもうつる依盆外　政尾

夕風の吹定やりて秋の風　常川

吹くくと松に降ても秋の色　自楽

身延の山寺詣せるに

逢者をとて極楽橋にくちると

虫の声杖に心を添へけり　金英

きり〳〵す秋のあはれをしらぬ庵　蓬堂
夕暗素尾花露らしてこよ庵　南丸
初アやうしろ淋しとおもふ夜よ　石蘭
たつ居小鳥合せる峠かな　三車
いと南ミ志はき世中しらて
初アどおもふそりよ驚よ庵　倭士
居ゆて寐たりおもへハ浮ぬる秋　其成
雅分して朝日出丸よ出よけり　益丸
我老をいのろく来てふけ秋の風　星布
詠りひし筥根詠をるとて
沖の小嶋小波のよるつるやと

秋の海よるさも波かくしえぶなら　祥東
たやおいのけしきせいて三日の月　素麟
秋ものあき一すじの尾根かな　岱雲
砧おほ居とハ身よ添ふ月秋哉　羅城
するハ皆白きくの魚と米よ庵　利丸
嵐雪か吟もきる事なれ
裏表きくハ白紙そ錆色なる　陌洞
朝らもつまのまをくむ秋かな　瓜坊
山残りんよき静よ居れハ草昔　七人 左好
比ならえらひと秋つるよその
ぬしハ霧しくならぬ声哉

のむのあらき交はせんすくても

あら寒

橘の実を啄ふるの雀かな　老亭

降雨はいつまでつゞくの秋の空　雲帯

おもしろき雲の出ても秋のくれ　三浪英

何處よりも鳥が飛なり秋の暮　古明

草の戸やたずねてくる秋の暮　書範

ことの音へハ小声なこゝろ秋の暮　松坡

寛政九丁巳年

春の遊

春の夜八心乃あまるたよりかな　士朗

たとへていはゞ春の居人　可鞏

舟もよし山もよしとや霞らん　静菅

酒たる旗取し小酒ぬくことの返　捨来

蒲むしろ敷たゞなかにあふて　漢甫

鶯を哀かなる木因の親　笑洞

伊吹と八十国なの名なるべし　里

剃去し沙汰の絲ぬ夕暮　菅

今さらと漢瞿麦をかざし折て　来

慈り淋しき茶の湯こゝろえ　甫
見しく音のぬけてる隅田川　洞
芦間の霧より川と出る月　来
幻の声ぬ泥をも喰るなり　左岳
そのくはかりハ芦荊にかゝれ　里
若の本と覚えて植る家の小　甫
比良川年に幾たひ出水らし　洞
長生をして素柳を唄ふハ　里
ちろりの鬼をのくれ人く　岳
漣に家三井寺の影見えて　岳輅
大角豆つめよと胡られ帰　桂五

水付けていかゝ宮もせの市の紫　古明
雑に散り黒ゝ跳の切つれわ　朗
家の丸うするうと雪ぬへく　岱青
柊なく寄る口をとの柱　以
孫の子ゝ然を床に招動て　朗
今雛くこむる肥後の角力取　青
要すく蘇引き寄る月の前　少海
水の上にもきこえくれ帰　路
小舟さし僧もゆれや峰の秋　素
老木の外なく一本涼やゞ留　朗
おちくと戸の打をも打きけ　五

水田の露にすゞしく拾うき　春

そのゝと捨る鏡の根まで　朗

春雨と雨ぞ降る夜ハなし　昭

咲付て匂ひ桜を見付けり　春

何を囀る四五十乃鳥　汝

くはく

なんくに鶯来る裏の山　蟠守

うぐひすの小声へつしたり梅の枝　猿左

鶯乃声継ひ込む日さし夕角　白圖

うぐひすやそこつに啼て二日来る　外六

新菴や梅をこぼれハ若菜畠　阿菊

春の後何に添ん落月夜　無曲

月影雲かゝりて梅のかほりかゝり　亀夕

坂下ゝ銭遊て寝ざ梅のも　貞松

木かくれは人声落し梅の月　遠之元

春ハ梅の香にほりた中る月夜哉　伯先

病中

寝て又小窓から見る柳かな　蕉雨

春の夢よくねて忘れたり　虎杖

玉おの露ちらけあり二日月　露仙

正月も月の数とすて跡よかり　菊羽

きさらきやうきとし老し人の恋　騏道

夕栄や波なき西を〆る丁　花縣

垣ねしく屋ころ計よ經子の声　天老

鄙くもる水ハ蛙のさわりかな　蘭二

ちらつきのやうや雲の胡蝶かな　太左

ある山寺よ趣ひらく

蝶とまれ笑ひ仏の手にとまれ　捨来

松風も吹しよ田和しのふさかな　鹿古

かくまての霞そとて何因ふし哉　少汝

馬刀やこりの初しろうありてくるか　方鳥

山吹の花しく垣ある菴買ん　羕昌

荘子画賛

高う飛ふ蝶や菜の花まんなかて　二柳

春の人見も柳ふうく遊ぶかり　卧央

植木をも見まわりて花の春へ　可申

江水流ふく四よ八桃の盛り哉　車大

おのもしき菴や桜によさひつつり　士朗

ゆくさくのとうよりや

詠遊ける初もかけよみなれ事

花の菴屯のうしろは結ひにけり　鳥語

奥山の春ハいつまて寂しし　魯隠

雲雀の滴を萩の夜明かな　徐英

桃李しとし

冬こもり経ハ海家ふかくら
や香の梅もきよつ竹や冬やしと
うい活ちょ芥十とせ余り暮となり
歩ん老洲の書捨のをしたよ活く
一旨しそ見出せる祥夫傳よ集て
とこゑ脇の句得つふ海つらんかし

うなゐ子が手まりの分くの今かね
しらく鳴出たるゆきとなりしきれハ
なれ竹のもとにすゑ汝ねむりやすくに
おき出ると寒さはありけれ

冬の河遊ひ

おくらしの中にさへつき枯木なる　闇更
冬の夜てらハ鳥にすはれまで　祥東
海をなし匂ひや洩れんねふりけ　可都里
月ばなをかきれ麻売のうき　鱒魚
さく波の枝を一里に詠やり　六珈
いらに結りん霰ちる柳しち　美敬
人こも嫁吟に朝はきのんで　臺珉
釘乃飛ある中庭の梅　里
うるはしよすこ流れなる菖蒲草　虎
たもひのことよる宵のむしろ　珈

瘤とる鬼を待るに花まなり　魚
祭りとは出ぬ伊勢の河上　琅
にぎはひあれ新茶やうたふらん　散
秋ほとくの声以てなり　夷
爪は中に鞠を蹴られ眼のなき　里
都を迎る僧も立り行く　魚
網代木に蓑丸うく流れの紅　珈
鳥さきのりて居の落つく　散
又立とつ太鼓の座をおとしけり　珉
さらに宗祇の杖はとやかしれ　里
よきみぞきかくの花よ呼て　夷

出も色はくいちかれの香よ　標冠
辞出る手を男もみんゆるし　魚
神楽とひつを傍に一吹　珈
十月の空は淋しき龍る川　散
足袋なく人をくふも送りて　珉
金拾ふ稀なひむかしの未なり　南丸
みんる度くよ探る　[illegible]生　夷
豆出し明石の浦のあはれさに　里
精舎もき沈て咲あやらん　魚
竹取り乳とつひもり世話も悩　冠
むし里とをし皆庄の山桜　散

かつくりと足結踊のく義のわと　珈

恋はくらく君ぞの少なき　九

初と星事て二人ゐ子やる笙の穂り　眠

障子のうちのにふる河本かれ　冠

名ぞし

不二を出し雲のり時雨袖のかり　恒九

等つ茶乃志るを迎なりけり二日月　春蛾

初霧たく門ハ日盛て小時雨　玉眉

江村旅泊

志くれけり秋ハ丞昭の秋しけり　紫蘿

とたのくま夜ハあけかぬる蘆薮まで　漫々

一押ゐ人の番戸中まで枯葉かな　都維雄

大根曳て松ハひとりまるりふかけり　成美

氷とつ鳴て千鳥鳴夜と楽ま亀　五貢

あたりも河中する杉わりり小秋千鳥　如雪

むつかしや千鳥ゐ中の三彩家　一草

旅

紙衾一秋ふしきの蔑去ろろ　月居

けふ乃て梅の蒼こさらし冬籠　蓋場

灯ともして人は旅立つ冬の影　冥々

拵へし紀庵や松風桐火桶　桂五

崖の盤木より洩るゝ冬の月　菊渓

山里や包むものなき冬の月　臺珉

小僧八山に隠るといふと

光照る家のはなれたる冬の月　鰭魚

春墓の里を出て

家杖にまかしおく枕中ぶ　静良

こゝろしや只白妙の二乃山　冥吏

雪の吹つけらるゝ筑波ぶ　長翠

おろくと日影くだるゝ雪の山　竹有

晴る日の雪思ふ紀母娘よし　春鴻

よるの雪月八思ふ人に隣よなり　柳荘

月落の氷しよせて渚の雪　左岳

寛政十戊午年

夏乃お祓ひ

竹の子やひと夜にかつく八重葎　暁臺

雨綿あらしの鼻月末よなり　士朗

帰ぬるに山ほとゝぎす鳴て　岳駱

水清く流るゝ八寸の手の音　方明

まつ照り朴の廣葉を吹かへし　杉　青
ぬかみその汁のおもしろき　秋　貉
順礼まんをたまはて拾ふ秋の露　朗
七夕星待ちやはつ並なれ　青
加茂川を西へうけつる夕涼　明
大工諸子の止む時もなし　朗
家鳩よ様の米を打拂ひ　貉
そらへとまて亦ぬ言葉　明
ちらくとおもをあて来る風の形　青
楫おふ聲の渡しを隣まで　貉
うれしひてぬ人の恨やつくすらん　朗

尼か来ておれ今胡の飲球　青
鶯にうくひす笠の花落ちて　明
菩の宿の主呑わたる　朗
やうても香き渡よりまえを嬉むし　貉
足袋ばかふ茶渋の僕　明
塩魚の伊豆よりあやし山家まで　青
入日のあかる胡態の雲　貉
稲荷よむ本の背の声の霊に　朗
高くふ人を思ひに寺　青
湧出れ温泉の二筋に流れ　明
あき風やく歯の抜る月　朗

ねびへり居るが八つまでゝせ　洛
梅屋の芸を一ポよしふり　明
妻諾ふ女もぬきる袖时舟　青
目培へ紀慈を見たる雨る秋　蘇
摘り表を何ふちらん小袖桂　朗
仮乃住居の汐ゐ知るゝ紀　素
子日ある松よ葉の貴きて袖で　以
多具山のとりし奈良坂の衣　朗
きゝれ嬉早表八一夜よさけて去　洛
袮ふむりひてその思ひ出れ　明

九そく
咲けまく萩の花葉ふ　斗入
宮きき印花葉ろその月夜ふ　鷺崖
ゐなの〳〵笑さゝり花花葉ふ　友國

盃整揺揺より
貧家よなさをわをと蜀記　六珈
我上よ鳴わ行う印けきれ　莫二
屋の戸をさして出るれハ露ぞ　壷伯
江湖よ趣ひて

ほとゝぎす夜汐の引て静なり　何鳥

郭公ころきよるの気しきかな　岳格

何の木よけの心そ果古る　可艶里

来ぬ笛よ蛍の子き口よふ蛍　五明

ましら鳴や日枝の山風波の音　委兄

時鳥涼きすみし夜の篠の葉かな　墨尚

久しく訪ざりけれ

標冠おを弱稼て

さ海くの芽をも見しらぬ芥子畠　静営

白芥子の散しも見える小家かな　希言

楹子咲いの形る埋ふも咲にけり　蔦三

閑さや柚の花こぼす一しきり　双鳥

夏の菊皆露らけふ咲にけり　巣紀

嵐に散りて松の葉ふ若葉ぬ月夜　紫暁

鵜飼消のらぬ篝火をしりして

窓よりふかや見ゆく人と影しけり　美敬

日

乾中やもの泡立つ氷室山　孤山

冬暮身頼白なり早川の鮎

唸せんといふ人のあきハ八之里

おそりの岨つたひをのぼり

くりそり撫置すりゝ八

忘草山路も撫す咲にけり　真洞

青鷺の蘆の下なり淀ハ晴　百池
精まひの秋ハ後から昨日なり　丈雪
人去らまで子鳥閑なり川さへミ　定雅
月涼し秋ハなすとあつまるもの　棋價
夕立やとちらをみても雲の端　一之
三井寺や鐘きえて鬼る雲の峯　昆明
みてしらずハ秋ちる紀地を染ぬなり　鏡平

甲陽　鶏鳴館　蔵

名家画譜　全部三冊

世に書画をもつて名ある人〻の先生たちよりて一紙半切に画をかきてかひ門人とあつてまなぶ者も文字の名ある名家の書画のおもむきをしらずして雅中の癖ありてことその道は執心あるものもなかなかおほくありて道理をしらずして便宜なるつかしく急迫して同じ上手も出来をようし候や遠境なれば文通の詩文あるさへ章句をしぐれの好事亦よ叶へんとの此書あらく三都の名家をいたし候ひもよ遠里の人〻も名のやうすあるもの也御所詩文をくはへて渇望の人の意を充たしむる者なり

西行堂記事

尾張国小すきの駅を去こと一里ばかり南青日井原国すへ木川あり西行渡と呼へり此川の若か西上人杖をとゞめて尾張なれの庵を結ひみ川ゆうら肖像を彫刻し給ふよし此の家の旧跡なり今も古俗の口碑に昔このあたり西行堂形ある川涯にたつるもまさく浩水のさしかも流れうせぬ数百年の後此の川下

なる此花村といふ所にて芦苅か泥中
より此石像を掘たりしを拾ひて
府下の史生某氏是を得たまへり
それより隠士白梵庵にあたへて紙
希有に生する佛くさ宝暦の末に南の
今雨庵に持し此石を小牧なる卧雲
布毛和尚なりと請求るの古縁一字
を造立の志ありて彼是にすゝめて
葉岡となり天地の営もなひらくしとて
て此日程はしめ其あら一の名内とて ふ
く筆す因地をトしく 安置しあり

此をめくる曼荼日井は八幡右に
世の事もあれてこの石像も何とき
ゆうかく漢れたる社中 此誰
かくれよふ念ひこゝに彼石像をぬひ
ましくん 僕々家のうちにはもとよ茅舎を
結ひ様をとうへ流をを堀い廻て永く
よゝの光をとゝむるものなり然
久此八のとし辛未の春得其
しるす

西行堂の前に
菊をとゞめてひらく
木瓜つゝし山はまだしき黄蜂が
鳥の巣守の留八郡にそし
手桶の氷よかくすが東の風
笠の行燈の灯つゝきかり
けふより涼の流れと人の手をひろは
楠葉広葉にむしろ置そる
薙行の奥の信ろ了ゐの果て
骨柴といふ集を書継く

士朗
得之
大阜
五雄
岳輅
秋挙
柏亭
几咲

山鳥氷のかたちに残る暁やちるは　里有
衣の九谷戸の船を押出す　可玄
琢はしりてまくるとのいこふ萩かれ　士精
ぬき足の彳となりゆくるふ　青虎
そそき尻に家君のぬるやの家え　杜月
滝のひきまうこく窓蓋　洪石
世の中の春にふる花のはらむる　鹿野
妻の雀のあらしむ　竹笠　滔龍
物狂ひ沼の袂を肩にかけ　芝
四条の辻を一舞に　行　朗
よろくと雉子のやくる馬の糞　雄

衆の苺の葉を落しけり　阜
思ひくさも枯てかしの萩の掻や　挙
瘡の鸚鵡のひりく甲斐なき　挌
鶯揉の山々落葉にさわるやし　咲
楼に採く浅間かふ　搗　亭
夏霞に雲間ふる　蝸牛し　玄
谷残加ぶ出ほ　本含の棗　有
帰るに川人家炬に急ぎりて　虎
降る程と落る梯の赤しき　精
出とものきらん家をりし　糠俵　石
布施を拂ふる　漣の　鐘　月

松風の音に蟹をふりさせて
ちろたりしく耳を挟ふ
たゝら踏む一日くの峯の雲
水浴のいろハ勝引に泳く
人の家に先うつりけり旅の宿
六日余の後のうけ旅ふ

竜野朗芝柗亭

士朗　三
得芝　三　大阜　二
五雄　二　岳輅　三
秋挙　二　栢亭　三

几咲　二　里有　二
可玄　二　士精　二
青虎　三　杜月　二
淇石　二　麿野　二
潜竜　二

いなつま這ふ道も死なくばさの秋　士朗
饭のあへ川蕣の宿　得芝
月の出る一ふ連衲まうち掛けて　柏亭
かつらの若き名をと追つる　朗
松風のとりもあへさぬ露ふむ　芝
酸茎をつまむきはらその末　亭
桶とるもの壬生をえさぬと洞を　朗
いつか成きる身とも筆へきこ　芝
よもすがら庭その家小笹水　亭

古人いくらの世や論つらん　朗
筆のあとみえてさまさま筆とり　芝
半日拾ふ　草湊の家　亭
夕月に二百の錢をしくれ　朗
筆に屋も柳　唐黍の売　芝
家毎につゝく出引て鳴り烏　亭
常もむすまぬさへ水の花　朗
花の虫　辛浅ハ野あれふく　芝
ひしと埋たる土手　柳のうけ　亭
虎杖ハ心なく嚙むよあはれ　朗
茶筅を洗ふ水のうれしき　芝

見る影に動くやうなる離れ山　亭
面白かしと笑ふなしりの咲　朗
戯女の茶にかふく嬾さ　芝
寿さくのつゝふるの錢蚕　亭
とまりしに浄脇を借る夕嵐　朗
柿なぬ茶ふする妓王か庵　芝
踊子か見るみと隣にかけ出かけき　亭
みのむし喰て氣かつかふある　朗
世の中のさうを井戸田の所也　芝
竹のなかの先ハ面ぬそあり京　亭
川蝶の夢を懐に入る平　朗

盆挑灯をさへハ淋しし　芝

羅漢るゝのと讀をうつらふさし　亭

火ハ蜀りの原乃書路暮ら寸　々

菊花ほ啼けむしき汲し　朗

枸杞の葉むしる庵の夕暮　芝

さくら咲く端ほ絹日ハ暮りけり　イセ 椿堂

朝ゐのうへ森も空の蒼うみな　大ヵ 千影

大宮の松をはしらふつらしき寸　近江 竜山

雪はれてみえらふ春小名ゝ　梅間

山寺やいろきせゝも落ふらん　卓池

大よくは花ある雨の花日かな　岳洛

胃の花は日なり　大垣川　黄山

一桶も手なき水ハなかりけり　十六 米彦

く胡ますても見る兵芭ハ日の字　竹有

朝毎にまくらはなれの杜宇　竹趣

豆部や萩にかさねる豆の月　野喬

もり来に筆迄ふよしも蓼の花　十六 万和

冬枯をとりきあつめりや銀柳　秋挙

浮鳥栩の宮ハ蝶の嵐かな　珉屋

まだ咲ぬうちから花や山桜　イセ 翠川

花ぞ花やと尋ん出ありく庵の主　十六 長秋

松ハ常盤しくの宮の桜かな　松菊

竹はしらよくもすまて月の月　松菴

いさよひやうけ給りたる山の上　三十六 梅堂

出る月を惜へきそらし山の上　可竹

春の寿ハ寿ぶ酒に身この終になり　ミノ 千阿

その事にすまひとへ桜かな　李臺

高萩やすこしたわれて春の月　七 其白

かくもしの春ふきり西の開古鳥　五道

深山木に佛も寄りてかんこ鳥　卓元

身をひくむ家ハわきてふとも秋の香　京 茂良

いさよひの月にあすともけふなり　鹿野

はゞきてこ出んかゝる古筆の青紙　大阜

蝶探にやぶうぐひすと橋ひなり　圃暁

銀柳来ぬよりもあきハ緒になり　毛 推巳

松老て枯てしきたる家の門　、孔阜

黒かみ白も志けりし種そ花の上　来利

若菜のよしの芽出る氣合にぶふ　野秀

小紫しもさくらの中ハ淋しかろ　似呂

花の色や山ハ龍胆の思ひもの　ハリマ田實

若菜ハ花の常と知れとも尺とも　葛丸

人に知らぬ雨か花の木かけ哉　拍亭

栽草辞

朱樹叟

桃杞園にむとし川しのうつハ其のはり
秋彼岸ぬ猫孫はうきい出き梅か
をとこに姚冢か止まとしてれ年の種を
六ツか七川のうちなひ子のほみ川
加うきまる蚕子をこう萩し松寄に乞え
ますりとハうすむうさきの日をゆえふ
さ海なるか中まつくと出海やるまとして
うつるかしいと嬉しくさす 詠みなれハ
をの山様来くいやうなかし 世

此ゑ伊勢山の宗鑑も末年の
務席も忍ひ出られ高わら筵かし
うそひ子の花を世ふさろの種も
おもむやうきまりさせてうる潤そ
ちるきれる

蔭うつて冨士も見ぬ庵の夢　近江 砂文
神下や雪に丸太る伊勢山　イセ 省我
折とふや錦手も丁八門田ぶ　国水
春風の日を又へ高き桜ぶ　草扑 手當
まちる所のそろしそろとわらり　駿六

加茂川へ流れ出ける雨の花　吐山
行春の戸口立てり角力取　十六 竹秋
瀬をとうさへかりなりすまひより　太ツ 宇洋
秋風や寺々へえんぬ山のれく　大蘿
春風や松見るまりて瀬田泊　餘祥
名桜の花かりなり雛の髪　三方 月巣
茶の蓋とさへ雛のいつも白　芳水
往まし八すゝまんうしてあらしる　三方 作亭
ちかきは佛も生き嬉ひなり　梅洲
らふと姫らあらけ生きぬ有り　廿六 琴州
あの山に菜さる秋雨の部分　几咲

猫の妻またかる垣根かな　鴬亭

とのゝふ猫とハきらしくいつもかり　楚雀

世よ何うハ藪鶯の中かれ　和楽

吾なくかり見えし宿なる清水かな　暁浦

桃さくの花をもひらく山桜　秋国

きのふなふ祝立をすの木も桜かな　湖凤

花車寄り蝶ものいそぬえなりし　浦且

なよくくと翔りし蝶のねぶりかな　杜農

父母の膝元によるくなふの月　蕉雨

月のんるや寂年によ袖を折かゝる　田江

三日月を何家ゝもやるかな芭　永み

居月や鏡もなかすぬ秋芒　平み

さいつたら月やこの出る萩の花　周瑞

菴を出れハ袖うちかへる芒かな　素檗

夕立の何とを山家の条かな　啓甫

夕かやの宿の夕飯になりかり　草人

西よこる何りさゝハ松風秋の風　李東

ふるさとや磬のぬきたる秋の風　九岳

鴨の鳴水に鏡さす楼のうれ　金陵

新霧や雀さわちむ門前口　五雄

何をれそ梅折捨る山の奥　素剛

梅の香よおほく歩行月夜かな　朱月

枯尾花ひしと留まぬ中に竟　　　イセ 雀鳴
枯芦を茶に焚雲の日くれ哉　　槿雀
里の子の森からも帰る蛙哉　　硯静
行春や湖に人まちかね里　　青虎
山吹や水の音もつゝし　　求已
山畑やひよりこたる鶏の声　　午凡
小夜更て庵の名も泣丁の声　　可玄
新渋のほとゝきす家へまかりけり　　月底
岩を鳥が来て啼像雪哉　　畜 拾葉
海老漁く信濃に入や来の暮　　常梅
朝〃や雛の錦仕る雀の子　　沙鴎

高ひくや餅て足隠く雛の宿　　宇梅
門鎖く音かも蓮を惜しかり　　大高
畔やまき秋の門口や麻畑　　里有
浜出ねる子をお寺の嫁しの　　大ク 五来
空鮭に味の深まる秋の暮　　三ヶ 佳雄
啼ならすとのかもあらすきかりてす　　三ケ 柳荘
雛子鳴や志の嬉しを家の声　　杜月
朝くに廿新なる野も子は哉　　梅葉
涼風に出る奈良の佛達　　橘光
枕の中くさにふさ枝哉　　葛井
名月や袖にかゝる草の露　　潜竜

水鳥の姿ふすまし鳰の湖　帋吏

驚く茄の数まはの入あきられ　雪封

おのこしきの色佐のや作山家　淇石

大佛の屋根く鋒とる雀かな　士精

櫻井の里まて　得芝

旅人は讓ある去りぬ花のかけ　希言

神寄て咲りくるものを山櫻し

和らつ葉の香八沸しきとも道　桂五

跋

老人宇䇿既乞得於像本光精舎令嗣子得芝造堂于園中引水植樹以為流憩之所先生携諸子遊此堂聊娯一日之餘閑作彼俳次綴歌行一韻吾徒欲梓行以揚立人之輝燿而示于世因跋曰本邦獨集冀萬方之騷士争有擭珠之賜則可以報

造堂之筆ニ手

胡桃
士精

俳諧五七集　枇杷園士朗先生著　全五冊

枇杷園先生ハ一世の雅英にして雄名海内にとゞろけり生涯の俳諧数しらず多年中も殊に風流新奇なれ数篇をえらび三十五部をつらねてあづけて五七集と是らくせん生涯の俳諧ハ見るにたらざる事なく善美尽せしものゝその流をくむ人ハ勿論他門の人もみなこまへらず玉をつらね金をちりばめ詞花言葉かしこくその餘の群英の句までひろく識ひべき宝と[illegible]書之

うづら衣　前篇後篇續篇拾遺

半掃菴也有翁ハ滑稽好事の魁にして俳諧の俳諧者なりしも余詩哥文章よくせずといふことなし其群出せる事ハ世の人のよく志れる所なれバ爰にいはずなくしてあしからぬもの狂文ハ殊さら一家の洒落にして奇々妙々句中に洩るゝ事もなく物も文意を尽くせり其前篇ハ既に先年より世に行れてよく人の称する所也後續拾遺も出せりてますく絶世の妙ともいふべき文をあつめて或人此書によりその轍をふましむハ文戯文の佳境をも得つべきものなり

蕙齋麁画　蕙齋翁画

一筆画譜　福善齋遺稿　北齋翁副筆

此二書ハ略画の臨本にして名家の筆の力をつくし数年の工夫をもていかなる人にも早速まなびうつして席上に一興をもよほすべき便となし且も俗にして俚なる風流漫戯の気象をもて四方の詞客俳人ハ画の力をかりて雅席のたすけとなし猶又ますます趣ありて清興をもよほすべし

晴雨考　年々出板

此書ハ年内の晴雨風雲を考へ五運六氣の理を
あきらかにして天地乃機密をうかゞひさだめて年々
出版なし世にあまねく知らしむることなり此運氣によりて
寒暖の順不順時候の正不正を豫知する物なれハ医
家ハいふにおよばず心がけ置べき事にしてその外養生
護身のうへにつきてハなほさら益ある書なれハ家毎に持て
ためしみて次第ニ重宝の多端なる事を知るべし
実ニ郷家必用の書なり

大全早字節用集

節用の類ハ世間に数板ありていづれも重宝なれどもこのたびの撰
ハいて何の字なりとも検ハやすからず古の数ありて引ハ早けれども
中にハかの頭の二字とて何といふ字をさがしかぬるに笠傘蓋のうち
何れならんと迷ひ又雲といふ字をさがさんとて雲とあるを見て
是なりと見ちがへ椿と漆陵と月水とをまちがひおやまりある類
あまたにおよびて字を聞きちがへて数のくらむなりてひくことならぬも
今此節用ハ天地人物竹木言語などを部分けにしていろはにして
ひく事早くその誤なく増字をくはへこれハ誠に無双の節用
なり

筑紫紀行　全十冊

我尾府下の菱屋平七翁といへるハ若き時ハ業のいとまに心を
もはら後年よいたりて于山山水をもて樂とせられしかも
中年のころ一とせ西國に遊びて長崎往來の紀行をつゞら
れしまゝに文政元年口に見聞の實事のまゝを記し
置かれたりしに其ころの事まて彼地へ行ん人と又後の
人の為に益あるべきやうに賞したまひての紀行といへり
名所古跡などの外に船宿の無利往來の日數順路など
委しく記しけれハ深切によせられたるこれまで開板の後とし

諸方より見たうけ來る人多けれども右を賣買せず
さんとての企よハあらず例え來たて歎しき人のためにしばらく
あるべしといへるの誠を以て我が家にて名所の
友あれども賣買をもゆるされし掛ば此翁も亡き先年
亡人の數に入られしが今ハかゝるまもなく再び板をもて
譲りうけせめて其ものゝ志意をうけ継て賣ひろめん
あまりて諸人のため深けれバ世に遊びてうちもとめ
なまじいに諸人は翁の志ろさしを察して此の世の
志をその書の益あるをも思ひ給ふべし

それしや親玉　全部五冊

お光の玉ハ薬罐の湯の光りに湯さり狸の睾丸ハ四畳半の茶席をさらひ鉄砲の二ツ玉ハ定九郎が胸をひやし知恵子の玉ハ小波が思ひ残して沢なかに八人玉は五六目の玉ひろふハさん玉あがるハ花火の玉叩して磨かざれバ光りなき医と申の目利自慢よ玉の言葉を数珠つなぎにあつめてある玉の年さらへ序申の儲けも無来る玉の新板よろづ付くそれしやの親玉とよぶハ玉の、お客へとてそれしやに玉子酒の酔きげんの一興よそ知るはれく玉子酒の酔きげんの一興よそ知る

おもしろ紀嶽なきん

枇杷園士朗七部集初編　飲中八仙　寄らかう集　山吹　鶯宿眼　麻かり　口笛　菊之懐紙

同　二編　橋日記　文化五の仙　揺求鳥　玉笈　花たちばな　婦人之日記　落梅花

同　三編　松の炭　琵琶袋　春河の硯　菊のちゞげ　三日月　名なし鳥　木の本つし

同　四編　法法寿経　冬乃くら　むとくとも　蕉花犬　葉末なる露　玉の露　名なし草

同　五編　長寿楽　拝柳子　みちのむし　聴さらく庵　常まうき記　旅寝紀秋　花はの戸

同　随筆　先生一世の随筆にして古今おもしろ話記小冊なり

同　窪芝集　朱樹翁東方記行なり続玉まて開板せしをあつむ

同　發句集　先生一世の名句数あり門弟初學の為にせし書なり

同　後篇　同前篇にもれたる数あつめし出なり

同　類題發句集　發句集にもれたる数集め四時雑にわかちて見安からしむ

東都日本橋新右衛門丁　前川六左衛門

尾陽名古屋本町七丁目　永樂屋東四郎

受入 36.3.14

蘭藥鏡原　全部五十巻　内草之部三巻出来

此書ハ原名「獨魯傑列印」ト云フ和蘭本草集成ノ書ヲ譯スル所ニシテ金石草木鳥獸昆蟲及ヒ造釀等ノ類ニ至ルマデ一ツモ残ス所ナク一品コトニ和漢ノ名ヲ記シ其性ノ温涼能毒ヲ辨シ其外彼邦ニテ製煉ノ術ニヨリテ藥精ヲ取リ露水ヲ製シ膏油酒醋等ヲ製造スルコトニ至ルマデオヨソ藥物ニアヅカルノ一ハ微細ニコレヲ論シ精密ニコレヲ辨セル所ナリコレモトヨリ醫家ノ至寶ノミニアラズ凡博物ノ諸君子ノ萬邦ノ名物ヲ捜索研究スル必用ノ珍書ナリ

尾張　東壁堂主人謹識

俳諧七部集　全

911.3
ミ